

## 卒業論文

—沖縄戦と現代の戦争報道から—

これからの戦争報道のあるべき姿と実現への道

早稲田大学 政治経済学部 国際政治経済学科 4 年

映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミ

高浦 明香

## 【概要】

本論文における「戦争報道」は、狭義の意味である戦場からの報道だけでなく、現在起きている戦争及び過去の戦争、戦後の社会、戦争を遂行する政府の動向などについてメディア（テレビ、新聞など）が伝えていることを指す。

本論文では、「これからの戦争報道のあるべき姿と実現への道」を沖縄戦と現代の戦争報道をもとに明らかにする。第二次世界大戦中、とりわけ新聞にほぼ限られていたメディアは、国家・軍部の言論統制により事実を報道せず、戦争の正当性を流布し日本国民を戦争へと駆り立てた。戦後、メディアの多くは「負の歴史」として事実を報道するようになった。しかし2000年に入り、政府のメディアに対する制限・圧力が高まり言論の自由を制限する法の制定や改正も行われている。メディアも政府などに忖度し、報道しない選択や重要なことであっても大きく取り扱わない事態も発生している。また現在、ウクライナ・ロシアやガザ・イスラエルなど世界各地で戦争が起きている。台湾有事など、一部では日本も戦争に巻き込まれる可能性が近い未来にあると言われている。そして私たちは、身の回りに起きていること以外、メディアを通じてでしか物事・事象を認識することができない。そんな中、1人の人間として正しく状況を理解し、行動するため、そして自分や大切な人たちの命を守るためには、いま一度日本の戦争報道の過去の過ちと現状を学び、今後のあるべき姿と実現方法を見出す必要があると考えた。

「国内最大の地上戦」、「ありったけの地獄を集めた戦争」と言われ、住民の犠牲者数が軍を上回った沖縄戦は、日本の敗戦にもつながった重要な戦争である。そして、沖縄戦を根幹とする問題が今も多く存在する。その一方で、沖縄戦について深く学ぶ機会はなかなかなかった。2023年9月に沖縄を訪れ沖縄戦を学んだ際、日本の民主主義や国家としてのあり方、今後の道筋を考える上で重要であると考えた。従って沖縄戦を研究することにした。

第1章では、沖縄戦や沖縄戦における報道を概説する。第2章では、琉球新報が「いまの視点と情報」で作成した『沖縄戦新聞』に焦点を当てる。当時の新聞記事にも着目し、その分析と『沖縄戦新聞』と比較する。第3章では、沖縄県二紙の琉球新報、沖縄タイムス、全国紙の毎日新聞、産経新聞による現在の沖縄戦報道の分析を行う。第4章では、「現在も続いている沖縄戦」として沖縄県の現在の問題に焦点を当てる。基地建設反対や遺骨未収集、民間被害者への未補償などの問題は、いずれも原点は沖縄戦である。それらの問題を書く報道機関がどのように報じているのかを見ていく。そして、根本的な問題である政府とメディアの関係、政府による法改正・制定や放送の免許制度などについて着目する。第5章では、「戦争体験者・戦争報道経験者の証言」として戦争体験者の河合節子氏、浅見洋子氏、金城実氏、沖縄戦報道経験者の小那覇安剛氏（琉球新報）、當銘悠氏（沖縄タイムス）、比嘉太一氏（元沖縄タイムス・元朝日新聞）の証言を一部抜粋して紹介する。第6章では、考察として戦争報道の目的、あるべき姿、その実現方法を述べる。その上で、実現における課題や課題の解決方法、課題の根本原因を明らかにする。また、

全体のまとめとして過去から現在の戦争報道がどのように変わってきたのかを述べ、さらに変わらない部分を含め、現在の日本が抱える問題を改めて振り返る。第7章は、本論文を通しての感想と本論文の評価及び課題を述べ、謝辞で構成している。さらに付録と参考文献を載せている。付録では、第5章の全容として「戦争体験者・戦争報道経験者全13名の証言」を全て掲載している。第5章で紹介したインタビューさせていただいた方々以外に、栗原俊雄氏（毎日新聞・常夏記者）、横田徹氏（フリー戦場カメラマン）、安田純平氏（フリージャーナリスト）島田陽磨氏（日本電波ニュース）、吉野蔵一氏（日本経済新聞）、木寺もも子氏（日本経済新聞）、キアラシ・ダナ氏（NewsPicks）の証言を紹介している。合計13名の貴重な証言は、過去・現在、そして未来の戦争報道だけでなく、政府やメディア、そして日本国家のあり方を考えることができるものだろう。各分野における第一線で活躍される方々だからこそ、あらゆる立場の当事者としての経験や視点、考えなどがわかるからである。

沖縄戦と現代の戦争報道を分析し、過去と現在における政府やメディアそれぞれの問題点、その根本原因が見えてきた。また、メディアや戦争報道の実態や問題点を、戦争体験者や戦争報道経験者に尋ねると、メディアと政府の関係性、それぞれの構造・性質、企業ごとの違いが見出され、日本の幼少期における教育の重要性が明らかになった。